

札幌医科大学附属病院 病理部 研修プログラム

1. はじめに

病理専門医は日本病理学会によって認定された研修施設において4年間の病理診断学の研修を行った後、筆記試験、実地試験を受けて認定されます。札幌医科大学附属病院病理部研修プログラムは、将来病理医を希望する方を対象とした病理診断医育成プログラムとして日本病理学会病理専門医研修要綱に準拠して行われます。

ご参考までに、認定出願の資格は以下の通りです。

- (1) 日本国の医師免許を取得していること。
- (2) 死体解剖保存法による死体解剖資格を取得していること。
- (3) 出願時3年以上継続して日本病理学会会員であること。
- (4) 日本病理学会の認定する研修施設において5年以上人体病理学を実践した経験を持ち、その期間中に次の各項の研修を終了していること。ただし、5年の実践期間のうち最高1年までを、厚生労働大臣の指定を受けた臨床研修病院における臨床研修（臨床検査医学研修を含む）をもって充当すること、また、法医での研修期間は、2年（法医学専攻の大学院修了者）までを充当することができる。
 - (a) いちじるしく片寄らない症例についてみずからの執刀による病理解剖を行い、病理解剖学的診断を附したものの50例以上を経験していること。
 - (b) いちじるしく片寄らない症例についてみずから病理組織学的診断を附した生検（外科切除標本を含む）5,000例（50例の迅速診断を含む）以上を経験していること。
 - (c) 日本病理学会、国際病理アカデミー日本支部等の主催する病理組織診断に関する講習を受講していること。
 - (d) 日本病理学会等の主催する細胞診に関する講習を受講し、細胞検査士を指導し的確な診断をするに十分な細胞診の知識と経験を有していること。
- (5) 人体病理学に関する原著論文または学会報告が3編以上あること。
- (6) 人格・識見に関する研修指導者の推薦があること。
- (7) 人体病理業務に専任していること。

2. 研修指導責任者

札幌医科大学医学部病理診断学教授・日本病理学会病理専門医研修指導医 長谷川 匡

3. 研修期間

病理専門医コース（4年間）

4. プログラムの概要

- ・ 臨床経験を生かし、病理専門医の指導の下、病理専門医資格を得るための経験・実績を積む。
- ・ 原則的には札幌医科大学附属病院病理部で診療医（全日研究生）として4年間臨床研修を行う。診療医には給与が支給され、健康保険等にも加入できる。一般病院での診療支援（いわゆるアルバイト）が可能である。
- ・ 多数の病理解剖症例を経験するために、日本病理学会認定の道内関連研修病院で研修を行うことが可能である。
- ・ 医学博士の取得は可能である。診療と併行して臨床医学研究に取り組み、研究生コースの場合は最短6年間で学位論文を提出する。大学院コースの場合は最短3年間で博士論文を作成し学位を取得する。

5. 研修目標

① 一般目標

病理専門医として適切な医療に貢献するために、病理診断学に必要な知識、技能、態度を身につける。

② 研修内容と到達目標

I 必要な知識

1) 病理業務に関わる知識

1. 病理業務に関連する法および制度を説明できる。
2. 病理業務に関するリスクマネジメント（医療廃棄物処理を含む）を説明できる。
3. 病理業務の資料を管理し、保存できる。
4. 病理業務でえられた人体材料を研究に用いる際の手続きを説明できる。

2) 病理診断に必要な知識

1. 基本的な病理組織標本の作製過程を説明できる。
2. 免疫染色を含む特殊染色の原理を説明し、結果を評価できる。
3. 電子顕微鏡標本の作製過程を説明し、結果を評価できる。
4. 遺伝子異常の検索の原理を説明し、結果を評価できる。
5. 病理診断に必要な臨床的事項を的確に判断し、病理診断との関連性を説明できる。
6. 病理診断に対してコンサルテーションの必要性を判断できる。

II 必要な技能

1. 病理解剖を執刀できる。
2. 臨床事項と考察を含めた病理解剖報告書を作成できる。
3. 偏らない臓器・組織からえられた生検、手術材料を診断し、報告書を作成できる。
4. 細胞診材料を診断し、報告書を作成できる。
5. 迅速病理診断において良悪性判定をし、適切な報告ができる。
6. 基本的な病理組織標本の作成（切出しから標本作製まで）を実施できる。
7. 病理業務におけるバイオハザード対策を実行できる。
8. CPCや臨床とのカンファレンスにおいて、病理所見を的確に説明できる。

III 求められる態度

1. 生検診断、剖検およびCPCなどに際して患者や遺族に対する配慮ができる。
2. 病理業務において、臨床医と適切に対応できる。
3. 学生、臨床研修医および病理専門医初期研修医に対する病理の指導ができる。
4. 病理業務に関してコメディカルと協調できる。
5. 病理診断の精度管理について積極的に関与する。
6. 学会、研修会、セミナーに積極的に参加する。
7. 病理業務の社会的貢献に積極的に関与する。
8. 人体病理学に関する研究を行い、結果を報告できる。

③ 研修教育スケジュール

- ・ マクロ所見観察、切り出し、鏡検業務を指導医の監督下あるいは指導医と一緒に（毎日）。
- ・ 指導医とともに術中迅速診断および細胞診業務に参加する（毎日）。
- ・ カンファレンス：症例検討Case Study（週1回）、抄読会Journal Club（月1回）、他診療科との生検・手術症例カンファレンス（月のべ4～5回）、剖検検討会CPC（月1回）に参加し、発表する。
- ・ 病理解剖（院内では月1～2回程度）に指導医の監督下で執刀し、病理解剖報告書を作成する。
- ・ 症例研究や臨床病理学的研究を行って結果を論文にまとめ、交見会、研究会、学会などで成果を発表する。

6. 研修後の進路

- ・ 関連病院などへ常勤病理医として就職
- ・ 細胞診専門医資格を得るために病理部において研修・診療の継続
- ・ 希望により国内外への教育研究機関、臨床施設への留学

お問い合わせ・連絡先

〒060-8543 札幌市中央区南1条西16丁目

札幌医科大学医学部病理診断学

Tel: 011-611-2111 (内線3663) 、 Fax: 011-615-1418、 email : surgpathol@sapmed.ac.jp

<http://web.sapmed.ac.jp/surgpathol/>